



「身体全体で感じる体験」

つつじが丘を囲むように植えられているツツジが、その紅とピンクの花びらを咲かせ始める季節になりました。

初夏の日差しを浴びながら、理科の時間に校庭の至る所で3年生が校庭の「春」を探します。

「あ、ダンゴ虫。」「てんとう虫の赤ちゃん見付けた。」「このタンポポ、日本タンポポかなあ。」「ルーペを近づけて観察する眼は、みんな真剣です。」



4年生は、図工の時間に木材をのこぎりで切る体験をしました。初めて使うのこぎりに悪戦苦闘していましたが、「引っ張るときに切る」とつぶやきながら次第に上達していきます。切り終わった後に「ふうっ」と息を吐いたかと思うと、香りも一緒に楽しんでいました。



28日、夏のような暑さの中、1・2年生が「はたらく消防自動車」の写生会をしました。本物のはしご車とポンプ車を見て興奮する子供たち。描いている絵を覗くと、細かいところまでよく観て描いていることがわかります。暑さと共に身体全体で感じた迫力あるダイナミックな絵が出来上がりそうです。



校長 上田 祥市

小学生の子供たちは、まだ言葉を十分に使って自分を表現することができません。しかし、身体全体で感じ取る力は優れています。春の風や若葉の匂い、虫の手触りや木を切る感触、消防自動車の赤の迫力や車の形状などを身体全体で一瞬に感じて、心に記憶していきます。

つつじが丘北小学校では、こうした身体全体で感じる体験を大切にしています。私たちは、この心に刻み込まれる体験を「潜在」と呼び、小学校時代に子供の潜在を豊かにすることが大切だと考えています。心に刻まれた体験は、何かのきっかけでよみがえります。子供たちは、成長するに従って言葉を獲得していきます。次第に言葉で自分を表現できるようになり、言葉からその風景や心情を想像できるようになります。それが、まさに身体全体で感じたことがよみがえる瞬間なのです。

5・6年生は、朝に詩の朗読をしています。

6年生は、谷川俊太郎さんの詩「春に」
子供たちは、自分



の声を聞きながら、自分の潜在と出会います。

「この気持ちはなんだろう ああ空の青に手をひたしたい …」身体と言葉がぴたっと一致した時、生きた言葉が身体から溢れてきます。